〔博士論文概要〕

# サッカーにおける相手ディフェンダーとミッドフィルダーとの間を利用した攻撃に関する研究
## ―プロサッカーリーグを対象として―

令和元年度

鈴木　健介

筑波大学大学院人間総合科学研究科コーチング学専攻

現代サッカーにおいて求められる攻撃戦術の特徴の一つには，選手間の距離を縮めたコンパクトな守備組織の中においてもボールをゴール方向へ進めるような，優先順位を意識した突破があげられる．サッカーの実践現場では，相手ディフェンダー（以下「DF」と略す）とミッドフィルダー（以下「MF」と略す）との間のスペース（以下「DF-MF 間」と略す）を利用した攻撃が，得点機会獲得のために重要視されている．そのため，DF-MF 間を利用した攻撃の重要性については，多くの指導書等でも言及されている．しかし，学術論文として DF-MF 間に着目したものは見られず，DF-MF 間を利用した攻撃の有効性は科学的に検討されていない．また日本サッカーは，プレッシャーの少ない守備組織の外ではボールを保持できるが，激しいプレッシャーがかかる守備組織の中ではボールを保持しゴールへ向かうことができず，得点機会を獲得できていないといったことが報告されている．このことから、日本サッカーは DF-MF 間を利用した攻撃に課題があり，日本サッカーの更なる進歩・発展のためには，この課題の解決策についての知見を得る必要があると考えられる．

サッカーでは，シュートやペナルティエリア（以下「PA」と略す）・相手守備陣背後のスペースへの侵入が得点機会として考えられてきた。これらの得点機会の多寡は，得点者の能力に左右されやすい得点数よりも，チームの攻撃を評価する上で重要であることが報告されている．さらに，攻撃の有効性を計るために得点機会に繋がったかどうかを基準として記述的ゲームパフォーマンス分析が行われてきた．攻撃の有効性の検討と同様に，日本サッカーの課題の検討も記述的ゲームパフォーマンス分析によって行われている．また，日本サッカーとして，日本国内におけるトップリーグである J リーグ（以下「JL」と略す）を対象とした研究も数多く行われてきた．JL を対象とした研究の意義の一つに，日本代表チームには海外リーグでプレーする選手も多いが，日本の優秀な選手全てが海外リーグでプレーすることはできないことから，JL の強化が日本サッカーの強化に繋がると考えられることがある．また先行研究では，国内リーグの課題について検討するために，国

内リーグと世界トップレベルのリーグとの比較や国内リーグの上位クラブと下位クラブの比較分析が行われている．

以上のことから本研究では，DF-MF 間を利用した攻撃の有効性を明らかにすること，および日本国内トップレベルのリーグと世界トップレベルのリーグの DF-MF 間を利用した攻撃様相およびプレー様相の比較により，日本国内トップレベルのリーグの課題・特徴を明らかにすることを目的とした．これらの目的を達成するために，本研究では以下の 2 つの研究課題を設定した．1）DF-MF 間を利用した攻撃の得点や得点機会に繋がる比率を，DF-MF 間を利用しない他の攻撃と比較することで，その有効性を検討する．さらに，JL と世界トップレベルのリーグの一つであるドイツのブンデスリーガ（以下「BL」とする）で DF-MF 間を利用した攻撃の様相に違いがみられるかを比較分析する．2）JL と BL において DF-MF 間を利用した攻撃におけるプレー様相の比較を行うことで，JL における得点機会獲得のための攻撃様相の課題を明らかにする．

研究課題 1 では，JL2015 シーズン 10 試合と BL2015/2016 シーズン 10 試合の計 20 試合における，攻撃側の選手がセンターサークルよりも相手ゴール側でボールを触れた攻撃（以下「侵入攻撃」とする）全てを分析対象とした．DF-MF 間を利用した攻撃の有効性の検討のため，攻撃を「DF-MF 間」・「サイド攻撃」・「その他」に分類し，得点・得点機会の生起率を比較した．また，JL と BL の攻撃様相の違いを検討するため，JL と BL で，全ての攻撃を対象として，攻撃回数・得点・侵入攻撃率・シュート率・シュート成功率・攻撃成功率を比較し，侵入攻撃を対象として攻撃種類の生起率を比較した．その結果，JL では，DF-MF 間を利用した攻撃はサイド攻撃よりもシュート・得点・PA 内侵入の割合が有意に高いことが認められた．BL では，シュートの割合においては DF-MF 間を利用した攻撃がサイド攻撃・その他よりも有意に高く，得点・PA 内侵入の割合においてはサイド攻撃よりも有意に高かった．また，攻撃成功率は JL が BL より有意に低いことが認められた．これは，攻撃成功率がサイド攻撃よりも有意に高い DF-MF 間を利用した攻撃の生起率が，JL は BL と比べて低いことが原因の一つであると考えられた．以上のことから，DF-MF 間を利用した攻撃は得点機会を得ることや得点に繋がる有効な攻撃であり，JL は BL と比較して攻撃成功率および DF-MF 間を利用した攻撃の生起率が低いことが明らかとなった．このことから，DF-MF 間を利用した攻撃の生起率を高め，攻撃成功率をあげることが JL の課題の一つであると考えられた．

研究課題 2 では，JL2015 シーズン 20 試合と BL2015/2016 シーズン 20 試合の計 40 試合，および J1 リーグ 2016 シーズンと BL2016/2017 シーズンの上位クラブ（4 位以内）と下位クラブ（15 位以下）が直接対戦した試合各 32 試合の計 64 試合における DF-MF 間に侵入した攻撃プレーを対象とした．JL と BL および JL・BL それぞれにおける上位と下位の DF-MF 間におけるプレー様相の比較のため，DF-MF 間へパスを出した選手，DF-MF 間でボールを受けた選手からパスを受けた選手, DF-MF 間でボールを受けた選手に対して計 11 個の測定項目を設定し分析を行った．その結果，シュート率・シュート成功率・DF-MF 間

侵入回数に JL と BL で有意な差は認められなかったが，攻撃回数は JL が BL よりも有意に高く，攻撃成功率・DF-MF 間侵入率では JL が BL よりも有意に低いことが認められた．さらに，JL は BL と比較して，DF-MF 間を利用した攻撃において，PA 内への侵入や守備陣背後のスペースへの侵入といった得点機会の生起率が有意に低いことが認められた．これは，JL における前方へのプレー生起率の低さが要因であると考えられた．また JL は，DF-MF 間侵入時に攻撃方向にいる相手守備選手（以下「前方 DF」とする）「0 人」の生起率が低いため，前方へプレーできていないことが推察された．さらに，JL は BL よりも DF-MF 間における後方へのプレーの成功率が低く，このことが DF-MF 間を利用するリスクを高め，DF-MF 間侵入率を下げている可能性が考えられた．JL の上位と下位の比較では，上位が下位よりも得点機会の生起率が高いことが認められた．一方で BL の上位と下位では有意な差は認められなかった．また JL の下位は上位よりも前方へのプレー生起率およびプレー成功率が低いことが認められた．以上のことから，JL は DF-MF 間でボールを受ける際，前方 DF のいない状態でボールを受けることでプレー方向「前方」の生起率とプレー成功率を高めることが重要であると推察された．このことにより，JL は DF-MF 間侵入率と DF-MF 間を利用した攻撃における得点機会の生起率を高める必要があると考えられた．さらに，JL は下位が DF-MF 間を利用した際に，前方へのプレーおよびプレー成功率を高めることで得点機会の生起率を高め，上位との差異をなくすことが課題の一つであることが推察された．

さらに研究課題 1 および 2 から得られた結果を総合的に考察し，JL において，DF-MF 間侵入時の前方へのプレー生起率およびプレー成功率を高めるには，DF-MF 間侵入時に前方 DF「0 人」の生起率を高める必要があると考えられた．そのためには，オフ・ザ・ボールの局面の「パスの出し手とのタイミングを図ること」が重要であると推察された．また JL の下位は，上位よりも DF-MF 間を利用した攻撃における得点機会の生起率が低く，この差異をなくすことが JL の課題の一つであると考えられた．JL の下位が得点機会の生起率を高めるためには，DF-MF 間侵入時に相手 DF の位置や動きを正確に把握することでボールを前方へ運ぶことが重要であると考えられた．

以上を総括すると，JL は，攻撃成功率を高めることと拮抗した試合を増加させることが課題であると考えられた．JL は，攻撃成功率を高めるために DF-MF 間を利用した攻撃の生起率を高めることが重要であり，そのためには DF-MF 間侵入時の前方へのプレー生起率およびプレー成功率を高めて DF-MF 間に侵入するリスクを低減させ，積極的に DF-MF 間への侵入を選択できるようにすることが必要である．さらに JL が，DF-MF 間侵入時の前方へのプレーおよびプレー成功率を高めるためには，DF-MF 間でボールを受ける前のオフ・ザ・ボールの局面において，パスの出し手とのタイミングを合わせ，ボールを受けた際に相手 DF のマークを外す技能の向上が重要となる．また，JL において拮抗した試合を増加させるためには，JL の下位が，DF-MF 間侵入時に攻撃方向の相手 DF の有無を正確に把握し，相手 DF がいない状況を逃さず前方へプレーすることにより，得点機会を増加させる

ことが必要であると考えられる．本研究から得られた結果は，DF-MF 間を利用した攻撃の有効性を示し，JL の競技面での向上に繋がるトレーニング方法の開発ための基礎となる知見を提供できるものである．